



発行所 亜炭広報社 編集人 伊達伸明

第四号

平成二十五年 二月二十八日

明日のまちを育む 地下鉄東西線 亜炭層も掘りました 平成27年度 開業予定 仙台市

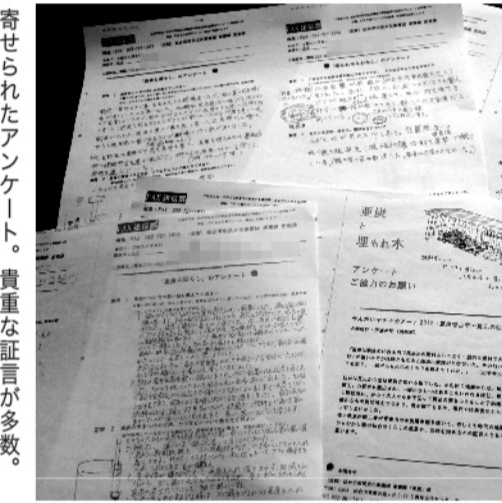
紡ぐ記憶 風景を活写

特別編成版

アンケート 紙上公開

泣き笑いの「亜炭物語」

昨春秋、展示と座談会を二本の柱として開催された「亜炭香古亭」は、アートイベントとして集客型活動を行なうとともに、時代的地域的にきわめてユニークな一つの生活素材について多角的に資料を蒐集しアーカイブ化するというねらいがあった。事前に行なったアンケートは、写真・文献等と並ぶ重要資料で、一部は抜粋して展示されたが、会期中それらを見た来場者がさらに個人体験を語って



寄せられたアンケート。貴重な証言が多数。

夕暮時の風物詩

昭和22年に川内米軍キャンプから撮影された仙台市内の夕景。亜炭の黒煙が立ちのぼる。(仙台市歴史民俗資料館蔵)



いっせいに焚く

我が家の風呂は鉄砲釜というものを使ったもので亜炭を焚いていました。風呂を沸かす係は私と祖母で、夕暮れにはあちらこちらから亜炭の燃えるにおいが漂ったものです。また我が家は織(の仕事)なので、糸を煮るときも大釜は亜炭を燃料にしていたね。 太白区 I

夕方になると亜炭の香りがしてくる(亜炭の煙はいからっまい)。自宅では使用していなかったと思う。 *

夕方あっちこっちから風呂を焚く亜炭の香り(仙台の1950年代のものか?)が立ち込めていた。子どもの風呂焚きの仕事でもあった。 *

暮らしのかたわらに

荷車で買って小屋で保管

・昭和34年(1959)山形から黒川郡大和町に転動しました。昭和36年(1961)頃と思います。西原の町営住宅に住んでから、亜炭を燃料とした風呂を使用しました。亜炭は最初の着火が大変でした。幸い西原に船形山麓のブナ材を主とする製材工場があり、その廃材(一定の長さでちょうどよい)を、確か工場にあった箱板枠付のリヤカー一杯いくらで購入しました。その他杉廃材も購入しました。最初に紙等、次に杉廃(鉈等で細かくした)材、次にブナ材。釜かほどよく暖まったところで亜炭を入れてたたくようにした。亜炭は旧古川市の「菅原千里商店」から2t車で1台単位で大きな塊を含め購入し、小屋に保管して使用しました。・若林区荒井宇高屋敷に昭和41年3月(1966)転動の為住居を変えました。その時残っていたものを風呂とともに全部運んできました。その後も「菅原千里商店」から仙台まで持って行ってあげるといって、亜炭を2~3回ほどいただき、昭和45年頃(1970)まで使用しました。割合風呂燃料としては煙・すす等多かったが、快適で燃料も自前保管が多かったので安心して使用できてよい思い出になっております。 若林区 S

家族の年間行事

小学生の頃、父が国家公務員なので一軒家の官舎に住んでいました。一年に一回、燃料手当として亜炭の配給がありました(風呂の燃料として使用)。当時の軽トラ一台分の亜炭が家の前に山積みされ、それを家族で外の風呂場と納屋に運びました。夕方暗くなるまでかかって運んだものです。いい時代でした。当時は家族の年間行事のひとつとなり、今では毎年秋になると秋の夕暮と亜炭の臭いが思い出されます。 青葉区 S



亜炭小屋

亜炭小屋にもドラマ

私の両親はよく喧嘩をしていた思い出がある。原因はわからないが、亭主関白の父が怒りだすと母は私をおぶり、亜炭小屋に逃げ込んだ。時間が経って父の「入れ」の一声でやっと明るい家の中へ入れるのだが、裸足で足裏は真っ黒、お風呂で洗ってやれやれという感じでした。 黒川郡 S

八木山産 vs 県北産

大正生まれの私にどれだけ記憶が思いだされるでしょうね。亜炭と言いますと宮城県は細倉・三本木がおもでした。戦争になり人手不足になった後に八木山に掘り始めたのでないですか。私の家は客寄の家業でしたので、トラックの小さいので亜炭やさんが持ってきましたね。(中略) 県北の亜炭は火持ちが良いが八木山のは燃えるのが早いのです。八木山の亜炭はお粗末でしたね。その為に長く続かなかったですね。 泉区 N

戦中・戦後の一時、近所に三本木炭(亜炭)の直売所があった。良質の炭で好評だった。 青葉区 T

亜炭 穴事情

私が金剛沢に住んでいた昭和54年頃、今の日赤病院の真向かい側に亜炭の山穴があって、ついその頃まで釣取の道(今の西多賀から日赤病院に来るバス通り)は昔亜炭を運ぶ馬車道で、中も今の1/4、しかも山道だったということでももちろんバスも通っていませんでした。この亜炭の穴を見に朝早く散歩がてら行き、その時はいろいろな動物に逢いました。ねずみ てん?、うさぎ、ムササビのような動物……。戦時中燃料がない時、亜炭でごはんをたき、七輪の中に炭と共に入れたり、風呂も亜炭でたきました。ひと昔、今の荒巻に鶴の湯という風呂屋さんがありました。その風呂屋さんにも亜炭でたいていました。各家には風呂もない家が多く、そこそこに混んでいました。庭の隅に山のように亜炭を積んでおいて、そこからリヤカーのようなもので釜場に運んで、スコップで風呂の釜に放り込んで焚いていました。燃えかすは道路にまくと泥道が歩きやすくなった。 太白区 N

うちでは使っていませんが、よく八木山に穴があると聞いたことがあります。 S

昔の小学校の校庭の片隅に大きな穴を空けてそのダルマストーブの燃えカスを捨てていた。 *

長文寄稿

わたしと亜炭

亜炭といえば記憶に残っているのは小学5・6年生の頃の学校の教室の暖房用燃料でした。時代は昭和26年頃「3丁目の夕日」時代の6・7年前の世の中は全般的にあまり裕福ではなく、戦後の荒廃から復興にむけ日本全体が頑張っていたころの思い出話です。現在の暖房エネルギー源は電気・ガス・石油ですが、6年生頃のエネルギー源は薪炭・亜炭であり、石炭もあったがこれは価格が高く一部の超裕福なところを除き一般家庭では使用されていなかった。冬場の学校の教室の暖房は現在のようにセントラルヒーティングや温風機等ボタンを押ししただけで暖かくなるというわけにはいかず「亜炭」を燃料にしたダルマストーブでした。このストーブは鋳物製でダルマ型をした高さ70cm、直径は太いところで約40cmで亜炭投入口と灰取り口があり、その反対側に煙突がついていた。朝一の着火は授業が始まる前に当番の生徒が杉葉(枯れた杉の葉)木(主に杉の枯枝)をストーブの下に置き、その上に細かく砕いた亜炭をのせておき、先生が来てからマッチで新聞紙を丸めたものに火をつけて杉葉に着火し、亜炭に火がつけば後はストーブの近くの生徒が亜炭を継ぎ足しし授業が終わるころに丁度燃え終わるように調整していた。ストーブは教室の中央にあり、火傷防止のためちょっとした柵があり、皆がよく弁当を温めるため柵に吊るしていたが、おかつの梅干しや沢庵漬等が温められて何とも言い難い匂いが教室中に広がったりしたが、誰も文句をいう人ではなく、これが当たり前だったのかもしれない。当時の弁当のおかつといえば、今のように食材が豊富ではなく、1クラス52、3人の中の大部分のおかつは梅干しや沢庵漬、ちょっとした佃煮くらいで焼魚等が入っていたが贅沢な弁当であった。6年生の時、教室の席は各自好きまるところに座っていたが、おかつの梅干しや沢庵漬のすぐ脇に陣取っていたが、やんちゃで悪戯坊主だったのでよく先生に

叱られた時には、ストーブの火かき棒で頭をコツンとやられたこともあった。亜炭といえば教室のダルマストーブ、ストーブといえば厳しさと優しさを併せ持つ担任の先生に迷惑をかけ頭をコツンとやられたことや沢庵のにおい等、今思えば懐かしくもまたほろ苦い思い出がある。秋も深まり、そろそろストーブという頃には学校行事として、学年ごとに全員で授業なしで朝から1日かけて学校近くの杉林に杉葉や枯枝拾いがあり、杉葉は家から持ち寄った炭すご(炭俵)に入れ、枯枝は束ねて男子生徒が背負って学校に持ち帰り、校舎裏の隅の方にある石炭小屋(亜炭が入っているのに何故か石炭小屋とよんでいた)に積み重ねておき、亜炭はどの鉱山で採掘された亜炭か分からなかったが、トラックで運びこまれてきた。亜炭は仙台の青葉城址でも採掘されると聞いたことがあり、大人になってから青葉城に登る回廊に木製の柵で入口が閉鎖された洞窟が所々にあるのを見たとき、これが亜炭を掘り出した穴だったのかと思った思い出もある。杉葉拾いは運動会も終わり、楽しみの少ない時期に皆でわいわいかがやき拾い方そっちのけで、山の中を駆け回った楽しい思い出がある。一般家庭では鉄砲風呂か五右衛門風呂で燃料は木材の切れ端や枯枝等薪の類で、石炭や亜炭はまだ高価であったので、使用していた家庭は少なかった。我が家は五右衛門風呂で沸かす役はいつも自分であった。水は風呂のすぐ近くにあった井戸から釣瓶でくみ上げ、木材の切れ端や枯枝等、薪の類で日暮れまでには沸くようにしていた。いつも夕暮れ時に帰る大工職人であった祖父が一番風呂。井戸水は飲料には適さず雑用で、少し離れた山の麓に飲料出来る水が沸く井戸があり、夕方近所の子供たちと誘い合ってバケツ2つを天秤で担ぎ、飲料水を汲みに行っていた。この頃から5、6年後各家庭にも水道が設置された。今では、天秤棒・井戸等ほとんど目にすることもなくこれもまた懐かしい思い出です。 泉区 O